

【研究ノート】

特別支援教育における教員の専門性に関する一考察 —普通学校における専門性との差異に着目して—

京都大学大学院生 松本 圭将

はじめに

デジタル化やグローバル化などを背景に社会の変化が急速に進む中で、教育もその変化に対応することが社会的に求められている。2021年1月、中央教育審議会（中教審）は『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（以下、「令和の日本型学校教育答申」）を取りまとめた。その中においては、社会が劇的に変化する Society5.0 時代の到来やコロナウイルスの流行による予測不能な時代背景を前提として、新学習指導要領の実施と ICT の活用を通じた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を掲げている¹。

このような教育の劇的な変化が求められている中で、それを支える教員に求められる資質や能力についても検討が求められる。「令和の日本型学校教育答申」においては、教員に対して ICT を用いた指導による児童生徒の個別最適な学びと協働による学びの実現が求められているほか、学び続ける教員像の提示も行われている²。この答申を受け、その目指す教育を実現するため、2021年に中教審において『令和の日本型学校教育』を担う教師の在り方特別部会が組織された。そこでは、個別最適な学びや協働的な学びの実現のために必要な教員の資質能力についても議論されている。本稿執筆時点では答申など最終的な議論の取りまとめは出されていないが、その議論の中において資質能力の試案として「教職に必要な素養等」「学習指導等」「生徒指導等」「特別な配慮や支援を必要とする子供への対応」「ICTや情報・教育データの利活用等」という観点が示されており³、重要な検討課題となっている。

一方、学術的な研究においても教員の資質能力すなわち教員の専門性に関する議論が展開されてきた。そのレビューを 2010 年代の研究を中心に行った辻野・榊原は、専門性に関する議論が初等中等学校の教員を前提としており、学校種に関わらない教員の専門性に関する議論が展開していないことを指摘する⁴。特に、特別支援教育について政策文書を見ると、「令和の日本型学校教育答申」も特別支援教育における教員の専門性について言及しているが、すべての教員が特別支援教育について理解を深めるということが言及されているほか、先の特別部会における資質能力における議論においてもそのような考え方が踏襲されている。ただし、この特別部会の示す資質能力は、特別支援教育に関する能力をその一要素として捉え、普通学校を前提としていると考えられる。学習指導や生徒指導は普通学校と特別支援学校それぞれに勤務する教員間で異なる展開を果たしている可能性も十分に考えられ、障害の理解といった専門性の一要素として捉えることは特別支援教育における専門性の理解を阻害するおそれがある。

上記のような状況を踏まえても、インクルーシブ教育が推進されている中で、学習指導や生徒指導など専門性の諸要素において特別支援教育と通常の教育課程における共通した専門性を検討していくことは重要だと考えられる。このような問題意識から、本稿においては特別支援学校と普通学校における専門性の差異を検討する。まず、専門性に関する先行研究や政策的な議論を整理したのち、特別支援学校

で勤務経験のある教員の語りを基に特別支援学校と普通学校での専門性の違いを考察する。

1. 専門性に関する先行研究と政策文書

(1) 教員の専門性に関する先行研究と政策文書

まず一般的な教員の専門性に関する研究について整理する。日本教師教育学会が発行する『教師教育研究ハンドブック』において鹿毛は、資質と知識という二つのアプローチの歴史を紹介している。特に1980年代以降生じた知識アプローチにおける視点について Shulman と Darling-Hammond の論を引き、その教師特有の専門的知識である実践的知識を整理するほか、知識アプローチの限界を指摘しつつ、非認知能力に関する研究の進展を踏まえて、「教師の専門的能力は具体的な文脈のなかで全人的に形成、発揮される」と指摘する⁵。そのような理解における専門性の発達過程を、勝野は「認知的で個人的な構成概念による教師の学びの理解を乗り越え、コミュニティと文脈の中における信念や態度の形成を含んだ全人的な過程」と整理する⁶。

では、近年の政策文書ではどのように議論されてきたのか。1997年の教育職員養成審議会の第1次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」では、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、これらを基盤とした実践的指導力等をいつの時代にも求められる資質能力とし、今後特に求められる能力として、地球的視野に立って行動するための資質能力、変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力、教員の職務から必然的に求められる資質能力を挙げている⁷。2005年の中教審答申「新しい時代の義務教育を創造する」では、教職に対する情熱、教育の専門家としての確かな力量、総合的な人間力という3点が示されているほか⁸、2015年の答申においては、それらに加え自律的に学ぶ姿勢が強調されている⁹。これら文書においては、使命感などの教職に対する情熱、指導に関するスキルや教科に関する知識といった教員特有の技能、コミュニケーション能力などの人間性という3項目が総じて示されており、それに加えて近年の教育を取り巻く環境から新たな課題に関する指導力やそれを身に付けていくための学ぶ姿勢が求められていることが理解できる。

(2) 特別支援教育における教員の専門性に関する先行研究と政府文書

一方で、特別支援教育における教員の専門性についてみていく。『教師教育研究ハンドブック』においては、主に教育職員免許法上の障害の領域（視覚・聴覚・知的・肢体不自由・病弱）ごとの専門性という点に言及している¹⁰。一方で先の「令和の日本型学校教育答申」においては、すべての教師に求められる特別支援教育に関する専門性として「障害の特性等に関する理解と指導方法を工夫できる力や、個別の教育支援計画・個別の指導計画などの特別支援教育に関する基礎的な知識、合理的配慮に対する理解等」を挙げている¹¹。また、専門性を養成する観点から、研修のニーズなどに関する調査研究が行われているが、例えば福田らによればニーズのある項目として、様々な障害における指導法・対応に関する研修や具体的事例・実践に関する研修、教育課程や学習指導要領に関する研修などが上位に位置しており、障害に応じた指導法や教育課程等に関する知識といった事項が現場の教員にとって専門性として認識されていることがうかがえる¹²。

一般的な教員の専門性に関する議論と異なり、教員の人間性という側面よりも、障害を持つ子供への

指導といったいわば技術的な側面に特化していることが指摘できる。辻野らが指摘するように、いわゆる教員の専門性と特別支援教育における専門性は別個に検討されているか、むしろ教員の専門性の一部という認識もあるように見受けられる。

2. 調査の概要

本研究で行ったインタビュー調査の概要について整理する。調査対象となるのは、X県の県立高校の教員であるA先生である。A先生は、研修交流¹³で特別支援学校の高等部（以下、Z校）にて3年間の教員経験がある。

A先生をインタビュー対象者として選定した理由として、特別支援学校教諭免許を保有していない教員だということが挙げられる。特別支援教育について制度上十分な専門性を持っていない教員が、普通学校での勤務経験を基礎としつつ、特別支援学校での勤務を通じて専門性について感じた差異を検討することから、普通学校における専門性との比較を行う意図がある。

A先生のプロフィールについて確認する。Z校に勤務するまでの経歴であるが、X県の公立中学校の講師を1年したのち高校教員として採用され、普通科高校（以下、Y高校）に5年間勤務したのち、6年目から知的障害の生徒を対象とするZ校に赴任した。中高の数学の教員免許状を所持しているが、特別支援学校教諭免許状は保有しておらず、知識は十分に持っていなかったという。

インタビューは2021年12月16日に30分程度実施した。質問項目については、特別支援学校での勤務年数などの基礎情報のほか、業務内容（担任や分掌について）、勤務して大変だったこと（授業、生徒への接し方など）、それまでの勤務校との違い、勤務して得た学びといった項目を軸として聞き取りを行った。

3. 調査結果

本章では、A先生の発言の中から読み取れる普通学校と特別支援学校での教員に求められる専門性の差異に関する事項を取り上げる。

(1) 個別的な指導と集団的な指導

そもそも、A先生が特別支援学校での勤務を望んだ理由に、Y高校における特別支援学校での勤務経験のある同僚の指導の個別的な指導に関心を持ったことが一因であった。実際にZ校に勤務する中で、特別支援教育における指導の個別性をどのように感じたのか。

教え方は悩んだね。あの、ほんとに普通の高校生に教えるのとは違うから。個々につまづくポイントが違う。この子にはこの教え方、この子にはこの教え方っていうふうに、やっぱり個別に分けて教えないといけない。

今までのY高校などでの対集団の実践と異なり、障害の差異にも起因する個々の生徒のつまづきに対応する形での個々に対する指導に戸惑いを感じていた。これまでの専門性に関する議論も、集団を前提として展開されてきた¹⁴。このような違いはどのようなことから生じるのだろうか。A先生の以下の発

言を引用する。

全然違うね。(中略)普通高校だとある意味、スルーされてた子が、特別支援学校だとスルーされないから、ちゃんと一人一人見れるから。だからこそ、気になったのかもしれない。

少人数での教育が展開される特別支援教育の余裕が、そのような個別的な指導を可能にするのだとA先生は考えている。このような形で、授業を行うというすべての学校種の教員に共通のスキルであるが、特別支援学校での指導においては集団指導という側面が薄れてしまう。さらに、A先生は集団指導を行う普通学校の教育で重要なこととして、生徒間の協働を挙げ、両学校での指導の違いをこう語る。

集団指導って言ったらあれだけど、結局は学びの個性化にしても、それぞれこう、学びの段階は違うくて、そういう子たちがどう協働して、学校の中でこう学力を伸ばしてくかっていうところがやっぱり、普通学校に求められている。特別支援学校ってそういう協働があんまりできないんだよね。

生徒の協働を生かした集団的な指導と個々の障害や発達を踏まえた個別的な指導という差異を強く感じていたことが読み取れる。

(2)生徒への接し方

個別的な指導が多いということが分かったが、指導以外の広い意味での生徒との接し方という点でも特別支援学校においては、障害を踏まえた対応をしなければならず、困難が大きかったという。

ダウン症とか、自閉症児、いろんなジャンルの障害を持っている子がいるから、こっちの働きかけによってそれこそ命にかかわるような事態が起こってしまうとほんとにまずいなってところで。なんだろうな、ほんと重度の子とかはほんと発語もできないし、こっちが言いたいことを察してあげるしかないし。なんか自分の指導によって、それこそパニックになることもあるから。なんかそれこそパニックになってなんかどっかこう危ないことになっちゃってもこっちが困っちゃうし、とりあえずはこう、安全は確保っていうか。そういう知識がないもんで。最低限、学校で預かる身としての安全の確保をしなきゃなっていう。

特別支援教育において、障害への理解は専門性の一つであるが、その不足が生徒の安全確保という点において大きく表れてくることが読み取れる。自らの指導を生徒がどのように受け止めるか、専門性の不足によりわからないことによる不安のほか、生徒間で外傷を加えるようなことにも気を遣ったという。このような専門性の不足を解消するため、A先生は休日に自主的に勉強をするようになったというが、この点についても教員の専門性と深くかかわっていることが推察される。これについては後述したい。

そのような障害を抱えた生徒たちと接し、そして障害について学んでいった結果、その後の普通学校での勤務において以下の2点の変化が生じたという。第一に、学級運営の中での個々人への配慮である。例えば、教室の座席順を決める際や掲示物を作成する際に視力の悪い生徒に配慮した教室づくりにこだ

わるなど、ユニバーサルデザインへの配慮ができるようになったとA先生は語る。

第二に、自分たちの指導をより自省するようになったということである。普通高校の勤務時代の自身の考え方や学校の風土を振り返り、「うまくいかないとき『あいつが悪いんだよ』とか、なんかこう『底辺校だからしょうがないな』とか（中略）子供のせいになる」と述べている。しかし、その考えは変わったという。

3年間で一番学んだのが、今までずっと子どもたちがうまくいかなかったら、うまく変わらなかったら、子供たちが悪かって感じて思っていたんだけど。でもやっぱり、教師のせいっていう風に捉えるようになって。（中略）結構そういう考え方をする先生が多くて特支の先生。やっぱり、障害を持ってる子と接しているのって、なんだろ、なんかうまくいかないと教え方が悪いっていう風だね。こちらが謙虚な気分になるし。

個別的な指導を重んじる特別支援教育において、障害を持つ生徒がどのようにすれば理解できるのかという個々にあった指導を意識する中で、今までの指導における生徒の見方や指導上の考えを改めるようになった。すなわち、自分の指導に対して、反省的な姿勢を持つように変化したことが読み取れる。

(3)学習する姿勢

3点目として、学習の姿勢が挙げられる。先にも述べたように、A先生は障害に関する知識という特別支援教育の専門性が不足していることから、休日に自ら勉強を重ねたという。特別支援学校においては、教員の学習の場が用意されており、教員たちの学ぶ意欲が総じて高かったという。

研修会なんかもいっぱいあったし。高校は全然研修会やってなかった。それこそ特支なんかは、月一では必ずあったかな。でまあ、仲間内の研修っていうかでもそういう話するし。そういう文化はやっぱり違ったかな。

特別支援学校における研修の充実と教員による自主的な学習の機会の多さが、普通学校の教員から見ると大きな違いとして感じられたという。このような際の原因として、部活動の有無を指摘していた。部活動に充てていた時間を研修や自主的な勉強に充てることができるため、このような風土ができていたことが推察される。

まとめにかえて

特別支援学校と普通学校での教員に求められる専門性の差異について、A先生の語りに基づいて検討してきた。教員の専門性の観点から考察を加えたい。

第一の個別ないし集団での指導であるが、先に見た2005年の中教審答申では、「教育の専門家としての力量」として集団指導が含まれていたように、集団指導が基本だとみなされてきた。一方、特別支援教育においては個別指導が軸となってくる。これは、特別支援教育では個別の支援計画や指導計画を作成することからも、個人をベースに教育が展開されていくことがその特徴だということができる。し

かし、インクルーシブ教育や個別最適な学びが推進されていく中において、専門性の一要素として捉えられてきた集団指導と個別指導を組み合わせた指導の在り方も重要になると考えられよう。

第二の生徒への接し方については、障害に関する理解という特別支援教育における専門性として従来取り上げられてきた要素が大きくかかわっている。さらに第一の点で見た個人の重視ということとも関係している。そのような視点をどのように従来の専門性の議論へと組み入れるのか検討が必要となる。

第三の学習する姿勢は、「令和の日本型学校教育答申」が示した教員像と共通する。しかしながら、教員の多忙が大きな問題となる中で、教員の多忙さによってその専門性が阻害されているということが再確認されたといえる。

特別支援教育に関する知識は、近年の政策等において教員の専門性の一つの領域として取り上げられてきたが、上記のような知見は、先の特別部会の分類でいうところの「学習指導等に主として関するもの」や「生徒指導等に主として関するもの」といった事項において、従来の見方の更新の必要性を示したといえる。すなわち、インクルーシブ教育が推進される中で、教員一般の専門性の一要素としての「特別支援教育に関する知識・技能」ではなく、これまで専門性の諸要素として捉えられてきた項目を多様なニーズを持つ児童・生徒すべてに対応しうる形でアップデートしていくことが必要だろう。

本稿は一教員の見方を通じて、教員の専門性に関する議論を見直すことを試みたが、十分に深めることのできなかつた点もある。専門性を明らかにするためには量的な方法やより多様な教員へのインタビュー調査を通じてより多角的な検討が必要であろう。これについては今後の課題としたい。

1 中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」2021年。

2 同上。

3 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会第3回配布資料「資料2_教師に求められる資質能力の再整理について」2021年、14頁。

4 辻野けんま・榊原禎宏『教員の専門性』論の特徴と課題—2000年以降の文献を中心に—『日本教育経営学会紀要』第58号、2016年、164-174頁。

5 鹿毛雅治「教師の専門的能力」日本教師教育学会編『教師教育研究ハンドブック』2017年、学文社、267-268頁。

6 勝野正章「教師の専門性と高度化」日本教育経営学会編『教育経営ハンドブック』講座 現代の教育経営5、2018年、学文社、104頁。

7 教育職員養成審議会「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第1次答申）」1997年。

8 中央教育審議会「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」2005年。

9 中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」2015年。

10 是永かな子「教員養成のカリキュラム（特別支援教育）」教師教育学会編、前掲書、2017年、204頁。

11 中央教育審議会、前掲答申、2021年、65頁。

12 福田弥咲・大伴潔・橋本創一・李受眞・山口遼・澤隆史・奥住秀之・藤野博・濱田豊彦・増田謙太郎「特別支援教育における教師の研修ニーズと専門性向上に関する調査報告—特別支援学校、通級指導教室の教師を対象として—」『東京学芸大学紀要総合科学系』第72巻、2021年、541-551頁。

13 X県では、高等学校教員として採用後10年間で3校に赴任し、その中で1校はへき地高校、中学校、そして特別支援学校の3種の学校のうちいずれかの学校へ赴任することが求められる（A先生の発言より）。

14 中央教育審議会、前掲答申、2005年。

A Study on the Professionalism of Teachers in Special Needs Education: Focusing on the Difference between Specialization in Regular Schools and Special Needs School

Yoshimasa MATSUMOTO

With the rapid changes in society, there is a need for a shift in education. In this context, the abilities required of teachers are being examined by the Central Council for Education. It has been pointed out that when examining the expertise of teachers, primary and secondary school teachers were taken into consideration. However, with the promotion of inclusive education, it is important to consider the common expertise in special needs education and regular education curriculum in various elements of expertise such as learning guidance and student guidance. With this in mind, we will examine the differences in expertise between special needs schools and regular schools. An interview survey was conducted with teachers licensed to teach at regular high schools about their time working at special needs schools. As a result, the following three points became clear. First, while regular schools are based on group instruction, special needs schools focus on individual instruction. Secondly, there is a difference in the way the students are treated. When students do not understand the instruction, they tend to think that it is their own fault, whereas in the regular schools, they tend to think that it is the teacher's fault if the students do not understand what is being taught. This is in the context of teaching that takes into account students' disabilities. Thirdly, the attitude and culture for learning exists among teachers. This is thought to be due to the busy workload of teachers. Based on the above findings, it will be necessary to review the conventional expertise.